

私が選んだ仕事

インタビューに答えてくれたのは、金モールのついた女性用の制服姿がきまっている小路美恵子さん。

運転が好きで、大型2種の免許を取り最初は川越のコミュニティバスの運転手をしてきたが、「はなバス」の公募を見つけ転勤して来た。以前川越のコミュニティバスに勤務していた時は、毎日のように見知った顔が多く、お見合いの話しもあったとか。今は、乗客の数も多く、忙しいので、親しく話せるような機会は少ないようだ。

でも、はなバスが通ると、「あっ！はなバスだ！」と幼い子達が手を振ってくれると……。

「はなバス」乗務員15人中、女性は4人。営業所に帰ると先輩の男性乗務員も仲間として迎えてくれ、和気あいあいで仕事も充実している。

常に心がけているのは、安全運転。乗

笑顔の「はなバス」乗務員



務中は、案内テープのほかに乗り降り、カーブ、ブレーキにあわせ直接ことばをかけている。特に高齢者や小さな子どもが乗った時は、着席するまで発車しない等、細かい気配りが伝わってくる。

乗務上での困ったことを尋

ねると、「狭い道での自転車の飛び出しが多く、お客様が乗車中は急ブレーキも踏めず大変危ない」と。子どもだけでなく大人も多いらしい。

どこまで乗っても100円。親しみのわく、はなバスにさわやかな小路さんの笑顔も見えた気がした。

野崎博人さんは34歳、「NPO法人サポートハウス年輪」でヘルパーとして働いている。3年前、「社会に役立ち、自分に合った仕事がしたい」と、7年間のサラリーマン生活に終止符を。全くの未経験だったが、福祉施設に就職するためまずヘルパー2級の資格を取った。

ところが当時は介護保険4月導入を前に、若い人たちの応募が多く、ハローワークでは年齢がいつているからやめた方がよい。ヘルパーは女性の仕事だから求人はないと、施設の就職口は見つからなかった。

あせりの出始めた頃年輪の募集を知り、早速面接に。立ち合った理事長とは偶然にも郷里が一緒で、「何か年輪との縁を感じた」という。

訪問介護には身体型、家事型とその複合型がある。常勤のヘルパーになって2年半、求めに応じて、24時間対応の当番制で家庭におもむく。外出介助や入浴介助など。オムツ交換も平気だが、最初は無我夢中でとまど

男性ヘルパーとして

男女の仕事にとらわれず、情熱を燃やす4人の方たちにインタビューしました。

いや失敗も。作った料理にクレームがきたり。料理だけではなくも苦手」と苦笑する。

ヘルパーになって見える現実もある。「エレベーターのない集合住宅では背負って移動するが、お年寄りはとも遠慮され、住宅環境に問題が。また介護の負担は働いている家族には特に重い。精神面へのケアの必要性を感じる」と。

「やりがいは利用された方からの声。これからもヘルパーを続けたい」という野崎さんは、インタビューを終えると又次の仕事へと飛び出した。

